

開拓者精神で 玉子一筋

昭和五十三年、若月商店(現・若月鶏卵)の食品加工部として発足したワイエムフーズ。大手食品メーカーや大手スーパーから依頼された『厚焼玉子』『オムレット』『玉子豆腐』等のヒット商品を連発したのち、今や九十五%もの商品が自社ブランドと言う。「お客様の要望に『NO』と言わず、喜んでいただける商品を適正価格で提供する」。その成長の源にあるバイオニア精神を訊いた。



各製造ライン、各梱包ラインのリーダーの皆さん



株式会社
ワイエムフーズ
阿賀野市
京ヶ瀬工業団地3610-157
代表取締役
わかつき しゅんいち
若月 俊一 さん



創業当時の定番商品
「プレーンオムレット」



卵の殻は粉末にしたあと、
地元の農家へ肥料として無料で提供



1日に殻をむかれるゆで卵は25万個



毎日、契約農場から仕入れた
20万個もの卵を割る



機械で殻む
きたあと、
手作業で入
念にチェック



大ヒットした「玉子豆腐」(左)と「茶碗蒸し」(右)

すごくおいしい
半熟味付玉子(2個入)



ワイエムフーズの名を
全国区にした「カニ玉ロール」



ラーメン店で提供される
「黄身がとろり半熟味付玉子」



商品検査、細菌検査を徹底し、
安全・安心な商品を提供



創業以来の人気商品
「オムレット」の製造ライン



アメリカ、カナダ、香港にも輸出されている
「厚焼玉子」の製造ライン

ゼロからのスタート

「そろそろ帰って来ないか」
鶏卵の卸商を営む若月商店の創業者である父から若月俊一社長へ連絡があったのは昭和五十一年のことだった。当時、若月社長は大手化学メーカーに勤め、技術畑を歩み、五年間のイタリア赴任を間近に控えていた。それまでも幾度となく父から帰郷を促された。しかし三十五歳で働き盛りの若月社長は現職を捨ててまで家業を継ぐことに迷いがあつた。

半年の事前イタリア出張を終えた若月社長の脳裏に、戦後の動乱期、郵便局から払い下げられた赤い自転車、朝から晩まで農家と小売店を往復する父の姿が蘇った。「今の会社には優秀な人材が大勢いる。しかし、若月商店には自分しかない」。意を決し、帰郷したのは翌昭和五十二年のことだった。

昭和四十三年、他に先駆け、サイズごとに卵を分けるGPセンターを設立した若月商店は当時、急速な成長を遂げていた。父から課せられた仕事は殻の破損した卵や規格外卵の有効活用。「鶏卵工場の隣に小さな工場を造り、玉子焼きとオムレットを焼く小さな機械を入れました」。従業員は若月社長夫婦と事務員の3人のみ。若月

商店の食品加工部として発足した現ワイエムフーズの前身は「顧客も注文もない、ゼロからのスタートでした」

鶏卵の販路から顧客を開拓し、少しずつ注文は増えたものの「このままではいかん」と大規模な設備投資を行って、第二工場を造りました。だだっ広くてね。この工場を商品で埋めるにはどうしたらいいものかと途方に暮れました」

昭和五十四年、若月社長は父から呼ばれた。「このままでは赤字がかさむ。閉めようや」。その言葉に若月社長は食い下がった。「親父、待つてくれ。石の上にも三年という言葉もある。もう一年だけ俺にチャンスを与えないか」。自分には前職で得た技術がある。新商品開発部で培った経験がある。早朝から深夜まで若月社長は新商品の開発に全精力を傾けた。結果、『玉子豆腐』と『茶碗蒸し』が関東圏の大手スーパーで爆発的にヒット。企業として独立する礎となった。

「衛生管理の行き届いた契約農場から仕入れた卵を自社で割り、その日のうちに商品化して、その日のうちに出荷します」。これが同社の一番の売りで、味の違いはここにある。

お客様の声は「金の卵」

創業当初、商品のほとんどが大手食品メーカーや大手スーパーのOEM(他社ブランド製品)、PB(自主企画商品)だったワイエムフーズ。『玉子豆腐』『茶碗蒸し』のヒットのあと、一日に十万余売れた『温泉たまご』『くんせい味付玉子』、そして『ス克蘭ブルエッグ』と、独自の製造技術で新商品を連発。立て続けにヒット商品を世に送ってきた。

若月社長は語る。「お客様の要望をよく伺い、誠実に取り組む、社会から喜んでいただける商品を適正価格でご提供する。これが当社の営業姿勢です」。従業員が汗水流して製造した商品をダンピングされ、儲けがさっぱり出ないというのでは社員に申し訳ない。だから「価格競争に組み込まれず、オンラインの技術力で勝負したい」。この営業姿勢を貫き、関東圏で自社ブランドとしての販路を切り拓いたのが若月社長の長男で営業を統括する若月哲朗専務だ。「人気商品『カニ玉ロール』を三本入りコンシューマーパックにして大手スーパーにご提案しましたところ、一気に当社の名が全国に広がりました」

今や九十五%もの商品が自社ブランドだという同社。若月俊一社長の掲げる社は「開拓者精神をもつてたえず前進しよう」は若月哲朗専務にも受け継がれ、現在、新商品を担当する二男・若月洋康商品開発部長にも継承されている。若月洋康部長は言う。「売上だけを指すのではなく、高品質と味を保ちながら世のニーズにいち早く応えていきたい。ゴールは日本一の卵食品メーカーです」。お客様の声は「金の卵」。OEM、PBで出発した同社には、どんなに困難な要望にも「NO」と言わない風土、経営方針がある。

技術のみならず人材の大切さについても前職で学んだという若月社長。三百人中三分の二近くを占める女性従業員のために平成十五年、事業所内保育所『きつずるーむ つばさ』を開設した。若月社長の長女・若月富美代園長は語る。「当社にはキャリアを積んだ優秀な女性社員が数多く在籍し、大切な当社の戦力。そんなお母さんたちが安心して働けるように、また働く母を持つ子が楽しい居場所と思えるように、と保育をしています」

若月哲朗専務は言う。「当社のDNAはチャレンジ精神とバイオニアスピリッツ。新潟には美味しい食材が沢山あります。そんな食材を配し、『日本一美味しい茶碗蒸し』をつくる。これが目下の目標です」

●株式会社 ワイエムフーズ(本社)
〒959-2136 阿賀野市京ヶ瀬工業団地3610-157
TEL 0250-67-2821(代) FAX 0250-67-2066
http://www.yfoods.co.jp/



本社外観



事業所内保育所「きつずるーむ つばさ」



園長
若月 富美代 さん



商品開発部長
若月 洋康 さん



専務取締役
若月 哲朗 さん

人と食と大地 に夢を

上越市の海岸沿いにある田園地帯・頸城区。昭和五十八年に五軒の農家で立ち上げた生産組合を平成四年、頸北地方でいち早く法人化。以来、農事組合法人ふあーむ大地は特別栽培米コシヒカリをはじめ、水耕野菜をハウスで栽培。次代を担う若者たちが地元の学校で地産地消、食育活動を行っている。平成二十年にはEストアワードで「新潟県賞」を受賞。その魅力を訊いた。



主に稲作を担当する皆さん

**農事組合法人
ふあーむ大地**
上越市
頸城区大谷内1857番地1
代表理事
みやもり せいいち
宮森 静一 さん



稲刈り風景



2009Eストアワード「新潟県賞」を受賞



特別栽培米コシヒカリの新米



東京大学卒業後、東京で教師をしたあと、農業志望者セミナーで松本祐一理事と知り合い、就農したという経歴を持つ嶋田匡憲さん



ハウスで栽培した小ねぎを仕分けする女性スタッフ



大豆栽培



「いい稲は稲姿がいい」



ハウス栽培担当、女性スタッフの皆さん



稲刈り体験で小学5年生とともに



地元の小学生から届いた礼状の数々

大地の力と人の力

澄み渡った秋空のもと、圃場を観察する宮森静一代表の姿がある。「いい稲は稲姿が違います。ほど良く背を伸ばし、頭を垂れた姿のいい稲を見ると、『今年もいいぞ。あの田圃へ行つて見て来いよ』と従業員に声をかけるんです」。収穫の秋は、従業員も実る、一年中で最も感動する季節だ。春、一面に水が張られた田に苗が植えられる。苗が成長し、二十本ほどの茎を出すと、「これ以上、茎の数は不要と判断して、それまで張ってあった水を干します」。排水がよくなるよう圃場に溝を切り、田圃が乾けば水を流す。稲の成長に応じて田に張る水の量を加減する。稲姿のいい稲を育てるには、米どころの生産者が培った水の管理が欠かせない。

「ただ作物は、用水から流す水だけでは生き生きしないんです。ときおり天から雨が降ってこなければ……。ところが、最近では異常気象が続く、管理にはひときわ手がかかる。異常気象の影響は作物だけではなく、平成二十二年十二月九日、竜巻に見舞われた。水耕栽培用ハウスと米の乾燥施設が一瞬のうちに吹き飛ばされ、多額の損害を負った。

「これから雪が降るといのに建物には屋根がない。ハウスにはまだ作物が植わっている。軌道にのるまでに半年以上。助けてくれたのは従業員と地域の仲間でした」。人々の力により、乾燥施設は年内に、ハウスは翌年の四月までに修復を終えることができたと言語る宮森代表。「天候には一番悩まされる」と言う。

異常気象への対策は「土の改善。大地の力、地力をつけることです」。地力をつけるため、ふあーむ大地では土壌診断を行って、結果に基づき、堆肥などの有機資材を圃場に施す。「数年前、頸城区に堆肥センターができました。牛糞と粉殻の堆肥、それらを圃場に散布しています」。このほか化学肥料を有機質の肥料に替えて撒いたり、種籾を温かい湯に浸けることで病害虫を消毒。抵抗性品種「コシヒカリB1」を導入し、いもち病を削減するなど、同社はエコファーマーにも認定されている。「秋には大型コンバインを圃場に入れるため、機械が埋まらない程度に土を乾かさなければなりません」。見渡す限り黄金色に染まった田圃の中で宮森代表の笑顔が輝いた。

そして若い力

日本有数の豪雪地、上越市。ふあーむ大地がある頸城区は日本海を西に望み、米山や妙高山に囲まれた平坦で肥沃な平野のほぼ中央に位置する。「コシヒカリなどの米を五十二・〇五ヘクタール、大豆を十二ヘクタール、園芸ハウス二棟で小ねぎ、三つ葉、サンチュなどを栽培しています」。

昭和五十八年に産声をあげたふあーむ大地。集落の五軒の農家で稲刈りから乾燥までの秋作業を行う生産組合からスタートした。農家に生まれ、農業高校を卒業後、ガラス工場に二十年勤務しながら、兼業で農業に従事してきた宮森代表。法人化した平成四年、「四十歳で会社を辞め、副代表に就きました」というのも、「農業が好きですから」。だから、どんな仕事でも苦にならない。

三軒の農家で法人化した組織は、今や従業員十八名を数える会社になった。「二十代が三人、三十代が四人、四十代が三人と、若者が多数、就労してくれています」。高齢化、後継者不足が喫緊の課題となっている日本農業の中にあつて、頸城区でも大農経営の多い旧大澁(おおぶけ)村は比較的后継者に恵まれていると

言う。そんな若者たちが頸城区の農協青年部で地元の小學生に米作りを教えている。松本祐一理事は語る。「田植えと稲刈りの季節には学校田に出かけ、米の美味しさや稲作の大切さを伝え、農業を身近に感じてもらうよう、一緒に作業しています」。頸城区には小学校が三校、中学校が二校あり、学校給食にふあーむ大地の味噌や野菜が提供される。「米も上越市が定めた学校給食用を栽培しています。学校給食で使ってもらえるのが一番嬉しいですね」。

「人」と「食」と「大地」を大切にしたい。ふあーむ大地という名称には、そんな思いが込められている。宮森代表は語る。「我々の理念は地域とともにあること、地域の人々の役に立つことです」。高齢者だけでなく、農作業が厳しくなった小規模農家に代わり、苗作りや田植え、稲刈りを行う作業委託や、冬場の上越市市道の除雪など、地域と積極的に関わるふあーむ大地。宮森代表は言う。「若い者には、『地域の見本になれ。誇りと夢を持って』と言っています。彼らは日本農業の明日を支える、希望の灯なんですから」。

●農事組合法人ふあーむ大地
〒942-0163 上越市頸城区大谷内1857番地1
TEL 025-530-2174 FAX 025-530-4393
http://www.farmdaichi.com



本社外観



看板



理事 松本 祐一 さん